

歸の痕(八)

○門司和田より東京黒田宛(端書)

(五月二十八日午前九時)

拜啓仕候

頗る靜穩なる航海にて只多幸を祝するばかりに御座候只今當地着いたし候明日はいよ／＼本地を離るゝ事に御座候此上とも海上の無事を祈るのみに御座候可祝

○香港和田より東京黒田宛(端書)

(六月三日)

香港より申上候

今朝入港仕り候氣候はむし／＼として梅雨あがりの如き感有之候今日のところまでは未だ一度も小間物屋開店いたさず候今日は非常にシケ居り候故明日出帆と相成候はゞいよ／＼ヘゞ候事と奉存候香港は船より見たるところにては丁度のぞきからくりの書割を見たる如き感じ相起り候

船中は道連れも出來中々愉快に御座候之れでは長の道中も辛氣な事も無かるべくと楽しみ居候

先は日々安着御報まで敬白

○古倫母和田より東京白瀧、湯淺、小林、北宛

(六月二十二日)

古倫母港口白波千尺防波堤に碎けて天に朝するところ獨り甲板に立つて左舷に月の昇るを見る望郷の念起つて禁

することが出来ぬ

今日は六月も既に二十一日だ君等に横濱迄見送つて貰つてから一月といひたい位だ船中隨分無聊に堪えぬ未だ四十日間も此狭い世界に蟄居して居らねばならぬと思へば隨分閉口の至りだ

此間から泊々で必ず一枚づゝ葉書を送つて置たから最早途中の事は省かうかとは思つたが赤い色やら青い色をなすくつたのもあるから或は失はれたのがあるかも知れぬザツト日記の中からヒツコ抜いて報道しやうか別段面白い事も無いけれど(以上三二一日夜記)

門司の風光は既に兄等の知つて居らるゝ所だ

香港についたのは六月の三日であつた風を犯して上陸して名高いケーブル・カアに乗つて山頂に登つたケーブルは山腹までかゝつて居る何分の一といふのか知らぬが厳しい傾斜のところを登りながら香港を一目に瞰下して自分の船はアレだコレだなどといひながら烟草を吹かす愉快サそれから頂上だが生憎雲霧り閉して數尺の先が見えなかつた此ケーブルは往復切手で上等五十仙中等三十仙下等十五仙一車が三つに仕切つてあるのだ

夫れ^{マア}がら公園に行つた各國の花卉樹木を集めて至れるものだ中に銅像がある之は先日の葉書にかいて送つた通りだ中々に甘い新嘉坡のでも當港のでも中々追付かぬ

其夜晚食後市中を散歩した東京でいへば銀座では無いマア小川町か神保町といふ様な賑やかな通で普通の商店の二階或は三階の欄干で歌を唱つたりベチャ〜喋つて居る支那人や日本人の女が澤山ある此の日本人が所謂海外醜業婦なるものだ毗を決して之を見れば皆零點以下のものばかりで其喋々して居る言語たるや天草島原邊の蠻

語である之で日本人だといはれちやア實に閉口せざるを得ない譯さ九時半頃沛然たる急雨雷鳴電閃と共に來つた熱帶の白雨は日本邊では見られない小蒸汽で暗黒の中に靜かに横はれる巨舶の間を縫ふて走せ馳せて本船にかへる途中電光一閃すれば港内の光景がハッキリ畫の如くなるかと思はれ又忽ち元の暗黒にかへりて只雷雨の音と檣頭に掲げた小燈がチラ／＼と見ゆるばかりなんぞは中々面白かつた

翌四日香港を出て新嘉坡に九日についた海面は油を流した様に平穩であつた新嘉坡に上つて直ぐ小川利八郎氏を市場の近所に訪問した植物園を見にいつた中々整頓した者らしいが自分が植物學なんといふ者は一切御存知が無いので折角來ながら殘念に思ふた此邊の土は真紅で草が真綠で天然其物の色が既にあついと思はれる甲板に金を兩換しようとか寝衣を買はぬかシャツは入らぬかといつて来るやつらは宛然たる達磨様なるには驚いた頭には赤い布をまきつけ眞黒で髭むちやなのが change money なんてやつて來ると雪舟あたりで御目に懸つた達磨様が御出なすつたと外思へない此達磨様も今世では隨分かけねをおつしやつて大概半分ね位のものを高々と仰せらるるには閉口した

新嘉坡でコバルトやカドミユムを買はふと思つたら三軒尋ねて新嘉坡中にたつたコバルトが一本しかないなんぞはあはれなものさ

日曜日がはさまつたので十二日に茲を出帆したペナン迄一晝夜で行つたが茲はペスト流行地だといふのに付て上陸は出來なかつた船に寶石賣だの煙草屋などが續々來た中には日本人から前に貰つた名刺などを見せる奴があるが其名刺が中々面白いヤレ此野郎は見掛けによらぬ正直者なりだと大詐偽師なり決して買ふべからずなどゝ書い

てある夫れを御本人知らずに得々然と日本人だと思つて夫れを見せるとは罪が無いものさ乗客の一人がソフアイヤといふ寶石を買つた初め三十圓といふのを段々直切つて仕舞には又日本人に見せる爲めに名刺をやるからといつて終に一圓で買つた其名刺には僕が眞面目な顔をして此奴はトテツもない大法螺吹なり三十圓のを一圓までまた買はんと思はゞゆるゝ直切るがよしと書いて呉れたがサゾ以後の良い紹介狀になるだらう呵々

十六日にペナンを出て二十日にコロンボに着いた検疫なぞがあつて廿一日即ち昨日上陸したタッタ五時間程の上陸だつたが日中ひなたをあるいたので今日まで頭が痛いのには閉口だ椰子か榕樹なぞが茂つて達磨的やら羅漢的な人間が居るのは中々面白いよそいつらが着て居る衣服は大抵單純な赤とか青とか黃とかといふ様な派手なので地面はマツカで樹葉はマツサヲで家は赤煉瓦か石積で屋根が赤瓦でゆつくり畫寐でもしながら寫生したら面白いものが出来るだらう佛寺に詣つたが丸で日本のとは異つてバラモンといふのはコンナであるまいかと思はれる様だ僧侶は皆裸體に黃な大風呂敷を巻きつけて居るばかり跣足で坊主でデコボコ頭のものやらヒヨウロク頭やら目が凹んで色が淺黒くて唇が厚くて五百羅漢なぞは決してウソでないと思はれた

船に慣れないものだから航海中は筆不精になつて何も仕ない只碇泊すると手紙を澤山認めるものだから充分な事は報知が出来ぬ此度此航路を取り此會社の船に乗る人の爲めに聊かでもなるだらうから案内見た様なものを送るつもりサ

先は出帆に間も無いから茲で擱筆する

歸の痕(八)

七月一日菊地、岩村、小代、佐野、久米、高島、黒田ノ七名箱根底倉ニ遊ビ梅屋ニ宿ス

○倫敦和田より東京黒田宛(端書)

(七月二十九日)

去る二十四日當地着直ちに山の手に下宿いたし日々美術館や展覽會見物いたし居候見るもの聞くもの只々喫驚の種ならぬは無之候大陸のを見ば如何ならむと此先きが丸であてがつき不申候本日當市出發ミッドルズボロに寄港しアントワープへ参る筈に御座候敬白

○伯林和田より東京黒田宛 繪端書

(八月十一日)

白馬會展覽會の成功を祈り候

Bei Frau Gruhn, Nollendorf str. 38.

○巴里岡田より伯林和田宛

(八月十九日)

雅兄御無事獨國御安着を賀し奉る

雅兄獨國行の事黒田氏磯谷氏より一寸通報有之しのみ他の學友諸氏よりは無く何日頃にか御來學にやと心待に待ち居候ひし也然る所雅兄の御手紙に速かに接する事を得大に愉快なる事に相なり候と喜び申候其上來春當方へ御來學のこと此上なき」と奉存候

今初冬に御地へ大塚文學士審美學研究の爲め再度参らるゝなれば同氏に何かの御話有りても好ろしき」と奉存候

獨國御滯在中になにとぞアルマン派の畫を充分に御研究あらせられんこと希望し奉る今日日本にて此の流派は雅兄の御存しの如く原田氏をのぞきては一人もなきと申てもよからん而て同氏によつて僅に絲口の開け候とは申ものゝ獨國中世の大名家は其名をだに知らざる人多く有之候わけ申がいなき事と存じ候日本に居りし時は畫學上及び他の事に付きかくまでは相反し居るとは思ひ申さゞりし雅兄も御同感の事と存じ候がいかゞにや當佛國などの畫の有様は巴里に集り居ると思ひの外地方の畫の勢なか／＼にて巴里に一週間滯在位では今世佛國畫の大勢を見がたきこと、存申候

來月初か末か米國に居る林氏大陸遊歴の爲め來るよし通知有之て候同氏も畫はすかるゝこと、存じ候何とぞ英なり獨なり佛に二三年止まり居る様來りしならは話し見んと存じ居候氏は尊地の方へ先に行くか當地を先にするか英國に着の上定めむよしに候

雅兄アントエルプンのバンダイキの三百年祭は御覽に相成りて候や本月十二日より開會されたるよし小生も來月初め頃再び同地へ參りバンダイキの畫及び近邊なるガンと申す所の展覽會も見度きつもりに有之候黒田氏よりの傳言はたゞちに實行致すべく候

雅兄御出發前の東京の繪畫の有様はいかに有之て候や來春御來巴の時に伺へば宜ろしけれども故郷の事にし有れば一時も早く知りたき心持致し候故御せはしき中に申かねたることなれど御手紙御送り被下る時に御報被下度願ひ奉候

尊地は寒さ甚だしきよしなれば御加養専一にあらせられんことを希望す

○柏林和田英作より東京黒田宛

(八月二十日夜)

拜啓仕候先日葉書を以て申上候通り去る八月十日當地へ永々の月日を經て安着仕候

其後フ氏の許へ毎日相通ひ仕事を致し居候

日本にある時は船の上にて少し位は勉強いたすつも又船の上では船量やら面倒臭きやらにて獨逸語の舊古をいたさず候處當地へ着するや先づ停車場にてまごつき馬車にてまごつき始終まごつき通しにて一寸外出致すにも字引は離されぬ事に候夫れにしても困入候は下宿の婆様と咄しお出來ぬ事にて候下宿は小生到着前フ氏が約束し置き呉れられ其の後は朝も晩も手真似や畫ばなしで頗る不思議に候

始めより朝の茶は下宿として呉れる約束故よろしかりしものゝ晝飯は食ひに行く事に候其めし屋も初めの日はフ氏が連れて行て呉れ候て其翌日より小生獨り故何を聞かれてもヤーヤーと返事いたし候故下婢も驚いたる様子に候此頃は黙して座すれば向ふでイ、加減に見計らつて持て來て呉れ候今日は可笑しき事にて一 ^{マツ}學いたし候イツモ彼様な事はなかりしも今日に限りビヤと申し候ところアイネ グロスピヤ オーダ クライネビヤと申し候グロスピヤと申せし時 エ? と聞き返へしクライネビヤと申せし時いつもの流儀にてヤーヤーと申し候ところクライネクライネと獨言いひながら小さき入れものにビヤを呉れ候小生の如き下戸には此小杯で澤山故明日よりクライネビヤと初めより命ずるつもりに候一儉約相覺え候直ちに字引を引き候ところ小さきと申すことにて候ひき呵々晩食は腸詰の本國とてパンと腸詰と薫肉を買ふて貰ひ手製の茶にて行ふ事に候ところ昨日は土曜日にて小生の蓄へ置きし食料は皆盡き果てし事に候止を得ず今日は日曜故買物は出來ずいつも食ひに行くめし屋は晝間のみ

故他の家へ行き候ところドウやら獨りで命じて獨りで腹をこしらへて歸り候モウ此分なれば一月もすれば萬事獨りにて便ずる様に可相成候とたのしみ居候

當地の寒きには驚入候土用の内に今日は冬着の外套を着て散歩いたし候此分なれば冬は懷爐でも持て歩かねばなるまじきかと驚入候

當地の美術館はロンドンなどに比してズット下り候様相見え候目今 Berliner Secession 申す會の展覽會が開かれ居候二度程日曜日に見物いたし候頗る不思議な繪の展覽會にて候中には非常に眞面目なものも候へど大に日本繪の廣重や北齋を眞似たり或は二三百年前の荷蘭の畫を眞似たるもの多くしてあまり珍らし過るものか一向感服いたし兼ね候

岡田へは再三手紙差出し候へども未だ返事に接せず候岡田は先般白耳義の方の各美術館を見物いたし候由アンザエルスにて古谷久綱君に面會いたし候折同氏の物語に候

此書狀御落掌の折は展覽會にて御いそがしき事と奉存候小生は本年の展覽會の成功を期して疑はず候
乍末筆久米先生佐野小代岩村様等へよろしく御鶴聲奉願上候

御暇の折には御手紙賜はり候様願上候先は右申上度敬白

○白耳義ガソ岡田より伯林和田宛〔繪端畫二枚〕

(九月十二、三日)

拜啓本日再びブルクセルを經てアムベルスに參り候バンダイクのエキスピジションを是より見に參る道にて有之候いづれ見物の上細々と申上ぐべく候十四五日の頃は巴里へ歸るつもりに有之候尊地の林氏によろしく御傳へ被下奉

願候(其一)

當地に昨夜着別書アムベルスより出すのを汽車に乗るのに取いそぎ忘れて當地から出す當地ミニユゼーは G.de Craye の畫に好きもの少々あり今代の物もちよと有之候

St. Bavon^寺にて有名なる Van Eyck の墓に御参り致し候 Van Eyck の畫今はブルクセルとベルリンのミニユゼーにありて此地の寺には寫しのみしかなし物たらぬ心地せり歸巴の上くはしく草々(其二)

○柏林和田より東京黒田宛

當地は最早寒氣相催ふし候

益御健勝奉賀候下て私事無事消光日々フ氏宅にてくだらぬ事を致居候間乍憚左様御安神被下度奉願上候

當地には先頃中二個の繪畫展覽會相開かれ一を Grosse Berliner Kunst Ausstellung[」]を Deutsche Kunst Ausstellung der Berliner Secession[」]し候此事は先般既に申上候様相覺え候兩方共去る九月十七日を以て閉

會いたし候同會の開會中は毎日曜日には Museum^に參るを止めて展覽會見物に必ず出懸け候

前なる方は所謂アカデミーの機關にして場所も鐵道停車場の舊物とはいへ中々立派なるといふ且便利なる地に御座候出品數も非常なるものにして彫刻染つけ硝子或はモザイクの下繪メダイユの彫刻等を加へて二千四百廿四點の夥多しきに達し到底一日では見盡すべきものに無之候出品者は燭逸聯邦は申すに及ばず佛國伊太利和蘭又英國等よりの出品も尠なからず候大別すれば

繪畫(油、水、パステル)

千六百十點

印刷物、新聞の挿畫及び其下繪 三百四十一點

彫 塑 二百三十六點

建築模型及び製圖 百十七點

工藝美術(染付ガラス、陶器等) 百二十點

メ二千四百二十四點

陳列室の數丈けでも大小四十九室御座候其大仕掛けには驚入候

他の Secession の方は急揃らへの板の上に布を張つて造りたる様なるしかも小さき小屋にして室も六つしか御座無く出品數も

油 畵 二百二十六點

水彩、パステル、墨繪 七十三點

彫 塑 六十二點

挿畫、下繪 二十七點

メ三百八十八點

の小數にして他の六分の一にも足ざるものに候

小生は兩方共ゆつくりいやになる程見物いたし候生意氣なる儀ながら感じたるところを申さば

大なる展覽會に入れば中には幾分の取除けも御座候へども何となく生氣なく一のアカデミー風の型の中に入りた

るもの多く強きアツトラクションを以て人を引よせるもの餘りに見受けず候殊に陳列品の内に一室は獨逸皇帝のエルサレムに行かれたる歎薄と皇帝の起居の狀を寫したる大形の寫眞のみを數十枚陳列したるなぞは美術會としては不感服に御座候

小なる Secessionの方は出品者も出品數も少なく候へども畫毎に何か一つのものを捕へて之を觀者にふき込むといふ意氣込みのある事は充分に見受けられ候中にはわざ／＼奇妙なる手さきの拵へ事をやりたるものや日本畫の出來そこねや古和蘭の風景畫の眞似等をなしたるものも少なからず候へども又獨乙風の正統ともいふべき Wilhelm Leibl の周密なる畫や詩趣に富める Böcklin の畫や眞面目なる Liebermann の畫やオスターングルフに住する畫家の正直に研究せる景色畫や實に見るべきもの少なからず候

先には此小展覽會は無かりしよしなりしもアカデミー連の藩閥の弊風をいともいゝより Liebermann いか又は Skarbin いかいふ遺手の連中は大展覽會へは出品せず此小なる方へ列なる始末と相成りたるよしに候

大展覽會の方にて數多ある中にも餘り甘からぬ畫に金牌が付いて居るには喫驚いたし候よく聞けば皇帝陛下が軍隊の首に馬を馳せて戰場に臨み玉ふ圖にて其圖が愛國心を増すといふ様なる事にて賞與ありしものなりとか餘りの事に難有涙がコボレ候

小生は存ぜぬ事ながら此獨乙の畫は此十年間に非常の變化をなし大に佛國風の感化を受けて進歩したるよしに候内の白馬會は今年は如何なる景況に御座候や先般白瀧へ通信をたのみ置候間いづれ樂しき報知を得る事と鶴首いたし居候

岡田より屢々通信をくれ候先日(九月上旬)はアンヴェルスの Van Dyck の展覽會とガンの展覽會見物の爲め白耳
義へ又出懸けたる由に候ガンにては Van Eyck の御墓詣りをもなしたる由に候

小生がフ氏と約束の仕事も十二月上旬には全然かたがつきそうに御座候同氏と小生との約束の第一條として「フ
キツシヤアは和田を柏林に四ヶ月間は止むべし猶三ヶ月間は柏林に止まるべく餘儀なくせらるべし」と相規定い
たし置候故十二月の十日にて丁度満四ヶ月に相成候若し夫れ迄に仕事が結了致し候はゞ如何に止まりたくも最
早フ氏は關係せざるべく候

先日友人方にて八月中旬の讀賣新聞を読み候ところ美術鑑査會の事が八金敷書列ねて有之候アレは最早相終り
候や巴里への出品は如何なる畫が參り候ものにや承はりたきものに御座候又國庫支辨にて巴里へ美術家を幾人と
か送らるゝよし如何なる人々が參られ候や吉岡君や寺山君など鑑査員に擧げらるゝよし記載有之候ひしが左様相
成候ひしや

五號館に鑑査を受くる畫を陳列するとせば白馬會の開會期日の邪魔には相成り候はざりしや本年の白馬會には
好天氣の續き候様祈り居候

當地は當時丸で日本の梅雨の候の如く連日の雨にて南獨逸バヴァリヤ邊にては大分出水有之橋梁の破損も夥しき
よしに御座候半球の東の部分はコンナ事の無き様に致したきものに御座候敬白

○巴里岡田より柏林和田宛
(九月二十二日)

拜啓早速御返事を差上ねばならぬに例の筆無性より今まで遲延仕り候

雅兄には遅かに御發熱有らせられたるよしされど速かに御平癒にて喜ばしく奉存候

黒田氏より最近に葉書參り候其を御覽に入れ申候

過日白國への旅はあまり風流なる旅行にては之あり申さゞりし也昨秋なりし和國のアムステルダム府にて十七世紀の大名家ラムブラントの期年祭の展覽會は開かれて候ひし行きて大家の眞蹟に接し見んと思ひ候所いかにせん身は貧書生の些の餘裕だに無くて候故心のみあせり申せど更に甲斐なく唯々北方の空眺めつゝ閉會の報に接し申候實に残りをしくぞ今まで思ひを申候所にバンダイクの三百年祭はアンベルスに開かるゝ事に相成ぬ是を亦見得ざることあらんには如何ばかり口惜からんと漸く旅費を作りて肖像畫の大家なるバンダイクの展覽會へ足ふみ入るゝことの出來候ひし也場所は御存知のミュゼイの後方にて八ツの室を以て會場と定められ候四ツは油畫四ツは水彩、銅版、墨畫、ペン、鉛筆、寫真等が陳列され點數は百三十七點これあり候バンダイクの晩年までの作は千百九十二枚に候よし今アンベルスには十分の一集り候事と存ぜられ候出品は多く個人の所有にて外國のミュゼイなどよりはほとんど出品なくされど個人としては英の女王伊國王などよりも出品有之候最多數の出品者は佛國畫家ボナー氏伊國王など皆十二三點も出品せられ候バンダイクの畫は雅兄も御承知の如く最も上品な畫格にて何を見ても歎賞するの外は之なく候多き中にて最好良なるもの十二三點有之候(これは小生一個の考に御座候也)

ガンの展覽會は近代の畫家のみにて出品點數は千百十四點畫家の國は白を始めとして英、佛、獨、伊、西、秘米其外二三國にて候大體皆好く餘り拙なきものなし

白國にてはブルクセル、ガン、アンベルス、リエイヂなどの畫家の出品殊によろしく畫風新らしき方多く(アンプレシ

ヨンニストにはあらず)ブルクセル、リエイヂなどよりは風景のよきもの多くガソ、アンベルスなどよりは人物風景なかく、好き物大分有之候ブルクセルの E. Laermann 氏の盲目及び酩酊者と云ふ畫は一種特別な畫風にてよく貧者の風俗を書き出され見る者をして特種の感じを起させ申候其外好き物と思ふものはサロンにて見しもの多く有之候人口二十萬に足らぬ此の市に如此の好展覽會の開かれ候とは實に不思議なることに御座候
小生本年はあまり無理なる旅三度致し候故冬籠に大にさしつかへ候べく今月末より一ヶ月乃至一ヶ月半ぐらい田舎に逃げ込む考致し居候

尊地は當地よりは寒さ餘程強く候よし承り候故何とぞ御加養專一に祈り奉る

〔『光風』四一 明治四年六月〕